

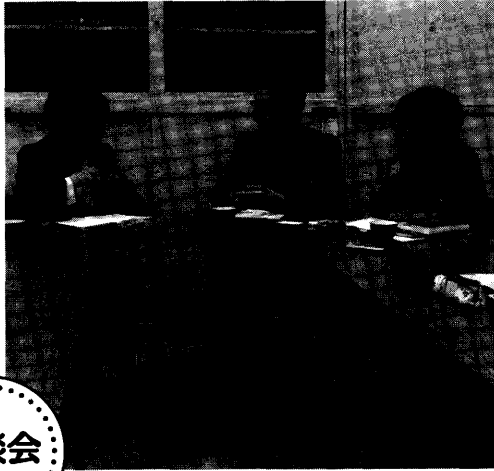
特集

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと

「子どもの視点に立つ」とは？

本誌リニューアル（季刊化）にあたり、巻頭を飾る特集では、「保育の原点を問う」という本誌の基本スタンスから、「原点」をどこか遠いところではなく、身近な日常の中に探っていこうと思います。幼児保育・教育の世界で「あたりまえ」だと思われることを取り上げ、そもそもどうということだろうと疑ったり探ったりしてみましよう。

第一回目のテーマは『「子どもの視点に立つ」とは？』です。座談会と、三つの異なる角度からの論文を通して、改めて考えてみませんか。
(編集委員会)



座談会

前原 寛(鹿児島国際大学准教授・元奈良保育園園長)

宮里 暁美(お茶の水女子大学附属幼稚園副園長)

浜口 順子(お茶の水女子大学大学院准教授)

子どもが真ん中に

浜口 前原先生は鹿児島県で一九八〇年代から長い間保育園の園長をされ、今は社会福祉法人の理事長と四年制大学の教員をされています。ご著書の『保育は〈子ども〉からはじまる』（ミネルヴァ書房 二〇〇五年）や日本保育学会における研究発表論文などを読ませていただいたところ、「子どもの視点」という言葉は、特に使っていらっしやらないようですね。



▲前原 寛氏

前原 そうですね。この座談会の前に振り返って考

えてみました。が、あまりそういう使い方や言い方はしていません。

浜口 一般的に「子どもの視点」というと、大人が「子どもの気持ちになる」という意味で、個人

のレベルでとらえる人が多いような気がします。前原先生は、保育園を運営統括なさるといってお立場もあるので、より大きな枠組みの中で、大人の視点から子どもを考えることも必要なのでしょうね。



▲浜口順子氏

前原 「子どもが真ん中に」という言い方は割合よくします。やはり、子どもが原点ですね。「子どもの目の高さに」と言った時には保育者とその子どもの関係が中心になるのではないのでしょうか。「子どもが真ん中に」と言う時は、そういう関係性も含めつつ、子どもが主体的であるような生活を、保育園においてどのように実現できるかということを考えています。

浜口 「子どもが真ん中」というのと、「子ども中心」というのは違いますか。

前原 意味は同じだと思います。ただ、少し個人的

なごだわりになるのですが、なるべく和語で、つまり大和言葉で保育を語りたいという気持ちがあります。子どもの世界は漢語の世界よりは和語の世界じゃないのかなど。そうすると、「中心」より「真ん中」という言い方になります。

それから、自分の考え方のくせもあると思うのですが、子どもと保護者を切り離すのではなく、保護者も子どもと一緒に生活している存在としてとらえています。そういう保護者の視点も、「子どもの視点」の中には入ってくるのではないかなど、思います。

遊ぶコーナーが出来ていく

浜口 「視点」というのは「目」なんですけれども、先生は「からだ」が保育にとっても大事だと言われていますね。

前原 保育所保育指針の「ねらい」の項目で「身につける」とあり、「身」という言葉を使っています。

この「身」という言葉も使いたいというか。

浜口 保育者には「身を入れる」面と「心を配る」面があると言われていますね。

前原 はい。「身を入れる」というのは、たとえば子どもの遊びの中にのめり込むような在り方といえると思います。「心を配る」というのは周囲との関係を意識する在り方といえるでしょうか。後者のほうは比較的認められやすいけれど、子どもと一生懸命遊ぶというほうは、他の子が事故に遭ったらどうするんだみたいなことを言われてしまうといっぺんにダメになってしまいます。

私の園では、一人が両方やろうとするのは無理がある、と考えています。ですから、ある意味、役割分担みたいな感じで、子どもの遊びに入り込む保育者がいる時には、気を配る保育者も必要になる、ということですね。

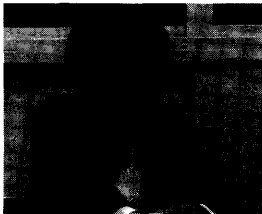
浜口 でも実際、役割分担といっても「今この人は身を入れているから私は心を配ろう」とか、そうも言っていられないでしょうね。

前原 そうなんです。その辺は、阿吽あうんの呼吸とか、先輩がやっているのを見て学びなさい、盗みなさい、というふうになりがちです。でも、たとえばコーナー保育の場合、コーナー担当の保育者は身を入れ込み、それ以外の保育者は周りに在る役割を意識的にやってみるんです。それを固定化するのが目的ではなくて、子どもと一緒に遊ぶとはどういうことか、気を配るとはどういうことか、を体感していきながら、いわゆる阿吽の呼吸でできるようになることを目指しています。コーナー保育のコーナー自体が目的ではなくて、保育者のそれぞれ担う役割というか、そこで働いている自分の職務というものを体感するということができるだけ比重を置いています。

浜口 先生のご著書に、コーナー保育のやり方を試行錯誤して変えていった過程が書かれています。いつの間にかコーナーが先にあることが枠組みになって、子どもが自由じゃないことに保育士さんたちが気がついて、また解体して、というような……。

前原 ずいぶん前の実践です。子どもが遊び始めていく中に、保育者がかかわっていくことよって、ある遊びが展開していき、それが一種のコーナーのような形になっていきます。

宮里 今日ちょうどそういう場面に出合いました。三歳児の遊びなんですけれど、一人の子が、朝顔の種がようやくカラカラに乾いたのに気づいて、採って集め始めたのです。そこに面白そうだなと思った子どもが寄ってきて一緒に種を集め始めました。他の種も集め始めて器が幾つにもなったので、それらと保育者が小さな机を出すと、そこに集めた種の入った器を並べ始めたのです。少しして「たねやさんって書いて」という声が出て、保育者がそのように書いた紙をその子たちが遊んでいるそばのブドウ棚の上のほうに吊るすととても満足そうな顔になる。次は葉を集めて



▲宮里暁美氏

「はっぴやさん」、花びらの「はなびらやさん」、枝の「木やさん」と、集めるたびに看板を書いてと云うので看板が次々に増える。そうやって遊んでいたのは、ブドウ棚の下という場所でしたが、周囲から見えやすい位置で、お店屋さんごっこのようなやりとりも生まれていき、今日一日、その場所がとても居心地のいい遊び場になっていました。

保育が終わった後、「あの場所ってちょうどよかったね」と保育者同士で話したのですが、前原先生の話をお聞きしていて、まさに「コーナーのような形になっていく」という感じだったなと思いました。遊びが作られていく時のリズムのようなものがある、コーナーが生まれてくるのかなって思います。

前原 先程言われた「あの場所ってちょうどよかったね」ということも、おそらくそういうリズムがあったから現れてくるのでしょうか。その場所についてのは何年もあったわけですよ。

宮里 はい、あったわけですよ。

前原 だけど、その場所があったから出来たということではなくて、子どもと保育者の動きの中から現れてきたものがその場所と結びつき、結果とすれば、ここがよかった、という話なのですね。

浜口 「子どもの視点」と言っても、広い視野から子どもの遊びを面白いととらえて援助しようとする保育者は、大人の視点に立っている。でもそれは「子どもが真ん中にいる」ということと同時に起こっているのですよ。子どもの視点に立つということを考えていくと、保育者として大人になることが、子どもに近づくというか……。

前原 つまり、子どもに近づかないと保育者としては成長しないといえるのではないのでしょうか。

子どもの生活を見ているか

浜口 子どもが生活するということが保育園の基本ですが、親子サークルのような場所になると、結局は親に「こうやると楽しく遊べます」と遊び方を教

えるような場所になっていてのを見受けまます。そこで子どもが意外と退屈そうな顔をしているのを見ると、「子育て支援」という名のもとに行われる活動で「子どもの視点」はどこに？　と思うのですが。

前原 それは「子育て支援」を考えていく時によく出てくる問題ですよ。一つには、そういう場をつくるだけでいいのかという行政のやり方の問題と、うのがあります。もう一つには、そういう場を「子どもの視点に立った」場にするためのかわりというか手立てというのを、保育者の側がどのくらい考えてやっているかという問題があるのだろうと思います。そういう場が用意するプログラムが、たとえば「活動計画」とか「活動予定」になっていて、子どもが自分で何かをするという部分がスポツと抜けているという問題ですね。

浜口 場づくりのハード面とソフト面があるけれど、中身を実際に運営する保育者が「子どもの視点に立てるか」ということにかかっているのでしょうかね。

前原 やっぱり保育に関しての一番の専門家は保育者ですからね。一つそこで気がつくのは、実は、保護者に見られながら保育するというのが保育者にとつてそれなりの圧迫感になるということです。そういう圧迫感を覚えると、それを外したくなる。外すのに一番いいのは、先に活動をセッティングして、そのセッティングされた活動に親と子を乗せてそのまま運んでしまうことです。

宮里 保護者自身がわかりやすいものを求めている、「いつ（遊び方の指導が）始まるんですか」と待っているということもあるように思います。

前原 確かにそういう保護者もいますね。でも、全体として見ると、自分の子どもがよく育っていくことを願っている。どうやったらよく育っていくのかということを考えていると思っっている。そういう保護者は少なくありません。

浜口 子どもが生き生きしていないとか楽しくなさそうだというのは、顔を見ればすぐわかるはずなん

ですけれど、なんであんなに気づかないのかって少し不思議なほどなのですが。

前原 一つは、実は生き生きした表情をあまり知らないということもあると思いますね。たとえば、自分の子どもが一人目で、育て方に一生懸命で……。

宮里 もう必死で、いつも子どもを追いかけて余裕がなくて、子どもが楽しそうに遊んでいると今のうちに家事を済ませて、と思つてしまつたり。

前原 子どもは自分から興味をもつて取り組んでいくと、本当に生き生きとします。そういう場面に実際に触れていくと、「あ、これが子どもなんだ」ということに気づいていく。子どもがよく育つていくということはこういうことなんだというところが、子どもの姿からわかってくるのではないのでしょうか。ただ、その子どもの姿、本当に生き生きした子どもの姿って、こういうふうに現れるんだよというのを実現するのは、保育者の役割なんですよ。

子どもが生活をつくる

浜口 これは昨年本誌二月号にも書いてくださったのですが、前原先生の保育園では、子どもが午前中元気のない様子を受けて、午睡を「午前休息」に切り替えたということでした。これも「子どもが真ん中にいる」ということから考えてやっていらしたということですね。

前原 自分としてはそういうつもりでやっています。肯定、否定するよりも、現実にならなっているというのを、きちんと認めなければいけないだろうということですね。「遅くまで起きていいですよ」ということをこちら側から言ったことはなく、基本的には「早寝早起きが大切ですよ」という姿勢でいます。でもそう言われて、本当に早寝早起きするようになるのでしょうか。厚生労働省の調査を見ても、子どもの就寝時間というのはここ二十年二十年ずつと遅くなってきています。早寝早起きが大事だといくら

言っても、自分たちの生活だって実際にはそうなっていない。好んで夜更かしをしているという人も一部にはいるでしょうが、今の社会状況の中では、日本人の働き方が変わり、長時間の労働を余儀なくされてしまうという面もあります。世の中全体の生活時間が遅くなってきた中で、ある一部の人がだけが早寝早起きをするようになるのは難しいと思うのです。

宮里 目の前の子をしっかりと見ることから保育を始めるという基本姿勢が一本通っている。「午前休息」の話を聞いてそう思いました。子どもたちが姿勢として表していることをしっかり見て、今何をする事かこの子たちには必要？ というふうにして生活を組んでいく。かといって、もちろん、どうぞいくらでも夜更かししなさい、なんてことは言っていないということもわかります。

前原 午前休息の実践はもう二十年以上前に始めたのですが、実は午後に戻したこともあります。ある

やり方が固定化してくると、その実践そのものが抜け殻みたいになり、そのままがいいのだろうかと疑問が出てきたのです。午後に戻した年、最初に入園式のときに説明し、それから二か月ぐらいたった時に保護者会をやったのですが、そこで「なぜ午後になったんですか？」と保護者から質問されました。そのお子さんの生活リズムがあんまりよくなって、夜更かしになったそうなのです。それを受けて、保護者会では急きょテーマを変更して話し合いました。私たちのほうも実は、昼寝を午後にしてから、何となく保育のリズムがうまくいっていないと感じていました。そんな時、保護者会でたまたまその話題が出たわけです。それで、保護者たちに午前中に戻したほうがいいか今のままでいいか聞くと、大体意見は半々でした。でも午後のほうがいいと言う人は一人もいなかったのです。それで午前休息に戻したという経緯があります。

浜口 きつとそれはどこの園でもそうしたほうがいい

いということではなくて、前原先生の保育園の、いろんな他の部分との関係なんでしょうね。

前原 それはあると思います。「休息」という言葉を使っているのも、「寝かす」ということを強制せず、「体を休める」ということを主にして、それで寝る子は寝てしましますが、寝ない子はそのままがいいというやり方をしているからです。

浜口 「食べる」ということにおいても、方針は共通でしょうか。

前原 みんなそろろうということは優先していません。だけど、子どもに生活のリズムが出来てくると、誰かが気がついて動けば、そこから連鎖反応的に動いてきます。三歳とか二歳の子どもたちにも「そろそろご飯だよ」と言えば、気がつかない子どもたちにも伝わります。全体に声掛けする必要はありません。そのため、外部から視察に来た人々たちには、場面がいつの間にか変わったみたいに思われたりします。でも、子ども主体の保育であれば、そうなるの

ではないでしょうか。

浜口 こちらが想定していないようなしつかりした生活性みたいなものを、子どもが自分から見つけていくということですね。

前原 子育て支援というものが一般に言われるようになってから、特に保育園の場合、それに振り回されているところがあります。子どもの生活を守るのとと、保護者の意見とをつき合わせて判断するのは難しいです。でも、親も子どももそろえようとしたらいけないと思っています。保護者も子どももいろいろあるのですが、保育園には子どもの集団があるわけです。そして、この集団をバラバラにするわけにはいかないので、どこかでそろってもらわないと困ります。その時に、そろえるのではなく、むしろそろってくるのだと考えているのです。

浜口 子どもが真ん中においてそろってけるとよいのでしょうかね。今日はありがとうございます。

(二〇一〇年十一月三十日)